

中央図書館のリニューアルオープンをめぐる

笹 本 正 治 （前信州大学附属図書館長）

はじめに

多くの方のご支援ご協力を頂き、期待を寄せられた附属図書館中央図書館の耐震・機能改修工事と増築工事が無事に竣工し、去る6月1日に無事リニューアルオープンの式典を行うことができた。

その後の利用者の状況や評判などを耳にする度ごとに、リニューアルオープンできてよかったと心から思っている。図書館長としての立場から、ここに至るまでの経過と感想などについてまとめておきたい。

1 古い図書館

リニューアル前の附属図書館中央館は、昭和48年(1973)3月に竣工した3,229㎡の南棟が主体をなしていた。

私事ではあるが、私は昭和45年(1970)に人文学部に入学した。当時は現在の全学教育機構に当たるものとして教養部があり、全学の一年生が松本で学んでいた。現在の人文学部がある場所には国立松本病院(現独立行政法人国立病院機構まつもと医療センター・松本病院、松本市村井町)があり、こまくさ寮に入っていた私は毎日現在の理学部の南側から教養部に通った。一年生の時に図書館に通った覚えがないので、当時全学としての図書館はなかったか、多くの学生が行く場所ではなかったのだろう。

二年生になると、私は思誠寮に入らず里山辺北小松に下宿し、人文学部に通った。当時の人文学部は現在のあがたの森にあり、鬱蒼としたヒマラヤスギの間に文学科と経済学科の建物が点在し、文学科は現在国の重要文化財として保存されている大正9年(1920)に建てられた旧制松本高等学校の校舎を使っていた。図書館も旧制松本高等学校のものをそのまま利用しており、大正11年(1922)に建てられた講堂の東側で、確か煉瓦造りだったと記憶する。中は薄暗く、木製の机が並び、大量の古い本が連なり、取っつきにくいものであった。しかし、日本史を学んでいた私にとっては古い本が多いことは幸いで、結構利用した。いや、他に本がなかったので利用せざるを得なかったのである。

私が四年生になった昭和48年(1973)4月、人文学部は移転した国立松本病院の跡地に新たな建物を造って移った。このため現在の人文学部に移り、図書館も利用することになった。つまり、私は新築されたばかりの中央図書館を利用した最初の学生の一人だったのである。狭く、暗い感じの、古びた旧制松本高等学校の図書館から移ってきたので、新図書館はすばらしい別天地だと感激して利用した。

大学時代の私の経験では、読みたい本のほとんどが信州大学になかった。卒業論文を書くにあたって、恩師の塚本学先生から「本がなければ自分が買って見せてやる」とまで言われた。先生が自費で本を購入

し、学生に読ませなければならないほど、蔵書は貧弱だったのである。これでも明らかなように、当時の私たちが求める本のほとんどは大学になく、自分たちで工夫して購入するか、誰かから借りるかが当然のように思っていた。それ故、使えるお金のほとんどは本に消えた。また、仲間や先輩、後輩たちとこの本は誰が買うと決めながら回し読みもした。他には何もなくても本をたくさん持つのが誇りであり、学びの飢えを癒してくれるものであった。

昭和49年(1974)3月に信州大学人文学部を卒業した私は、4月から長野県の最南端にある長野県立阿南高校教諭になった。本当は大学院に進みたかったのであるが、この年は合格しなかったのも、教員になったというのが実情であった。新任研修において何か言いたいことがあるかと問われ、阿南高校のような地域高校では本を購入するのも難しいので、是非図書室を充実して欲しいと述べ、輦轡を買った。高校教師の世界は楽しくはあったが、まだまだ勉強が足りないと考え、翌年退職して名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期課程に入学した。

名古屋大学へ行って最大のショックは、研究室および図書館が所蔵する本の圧倒的な量であった。古い本から新しい本まで必要とする本はほぼ揃えられ、史料の量も質も異なる。重要な史料については写真版で読むことができた。大学院に入ってから東京大学史料編纂所や京都大学などに行くと、さらに本や史料の量に圧倒された。仲間の学生の下宿に行くと、本箱にあったのは『マルクス・エンゲルス全集』だけだった。本は大学のものを読めばいいとの観念が強く、本は入手して読むという地方大学出身の私とは圧倒的な差であった。しかし、大学時代の習いは消えず、私はひたすら本を買い込んだ。

私は昭和52年(1977)3月に博士課程前期課程を修了し、同年11月から名古屋大学文学部助手になった。この助手の仕事は江戸時代に木曾三川の水奉行を務めた旗本交代寄合の西高木家に伝わった古文書の整理と目録づくりであった。職場は当時の名古屋大学附属図書館であった古川図書館で、建物二階の北側の部屋だった。古川図書館は昭和39年(1964)に古川為三郎夫妻の寄附でできたもので、既に相当古かったが信州大学の図書館からすると遙かに大きかった。職場が図書館の中だったので、いざとなると館内で調べ物をし、大量に本を借りて読んだ。当然書庫の中も自由に立ち入ることができたので、図書館がいかに素晴らしいものであるかを実感した。

私は昭和58年(1983)4月より文学部国史学研究室付きの助手となり、翌年3月までその職にあった。こちらでの仕事は研究室の本などの管理と学生対応が主で、研究をするために時間が与えられていた。

この間の昭和56年(1981)、名古屋大学においては中央図書館が新たに建設され、文学部などの北側、現在地へ移った。古川図書館時代と比較すると格段に環境がよくなり、面積も比較にならないくらい大きくなった。

名古屋大学中央図書館が新しくなった昭和56年(1981)、信州大学中央図書館では現在の北棟に当たる1,227㎡の書庫を中心とした部分が増築された。その3年後の昭和59年(1984)4月に私は縁があって、人文学部助教授として母校に戻ることができた。

信州大学の中央館も北棟が増築されてからそんなに経っておらず、私が学んでいた時期からすると良くなっていた。しかし、名古屋大学の図書館に慣れ親しんでから母校に帰ると、信州大学の図書館は大変貧弱に見えた。日本史を専攻する私としては、本学の蔵書数が少ないことは致命的であった。この

ため信州大学に赴任してからも自分の使えるお金のほとんどは本に投資した。

2 蔵書数

本学の図書館における本の少なさは明らかであり、人文学部の教員や学生共通の悩みであった。

参考までに平成24年(2012)における日本の大学の蔵書数のベスト20を確認すると次のようになる(<http://10rank.blog.fc2.com/blog-entry-230.html>)。

1	東京大学	9,153,000冊
2	京都大学	6,557,000冊
3	早稲田大学	5,358,000冊
4	日本大学	5,283,000冊
5	慶應義塾大学	4,826,000冊
6	九州大学	4,108,000冊
7	大阪大学	3,987,000冊
8	東北大学	3,957,000冊
9	神戸大学	3,733,000冊
10	北海道大学	3,684,000冊
11	広島大学	3,391,000冊
12	名古屋大学	3,130,000冊
13	立命館大学	2,947,000冊
14	一橋大学	2,643,000冊
15	東海大学	2,621,000冊
16	大阪市立大学	2,612,000冊
17	同志社大学	2,574,000冊
18	筑波大学	2,572,000冊
19	中央大学	2,471,000冊
20	近畿大学	2,266,000冊

本学の規模、状況を考えて他の国立大学の順位を連ねると次になる。

23	岡山大学	2,127,000冊
30	金沢大学	1,824,000冊
35	新潟大学	1,668,000冊
36	山口大学	1,623,000冊
42	横浜国立大学	1,408,000冊
43	千葉大学	1,394,000冊

44 富山大学	1,332,000冊
48 熊本大学	1,283,000冊
50 鹿児島大学	1,269,000冊
51 信州大学	1,245,000冊

本学は全体の51位で、東京大学の蔵書の13.6パーセントを所蔵するに過ぎない。私が学んだ名古屋大学の蔵書の40パーセントにも満たない。

文科系には本学出身の教員はほとんどおらず、多くが旧制帝大系の大学出身だった。多くの蔵書に恵まれた環境に身を置いたことのある研究者にとって、本学の本の量が少ないと感じるのは無理もないことであり、私も同僚や学生たちと本が少ないことを嘆き続けた。

平成21年(2009)10月より山沢清人学長から信州大学副学長と附属図書館長の職を命じられた。これまで外野から図書館に苦情を言っていたのが、周囲から本が少ない、建物が古く汚く狭いと文句を言われる立場に変わったのである。実際、中央図書館についてだけでも28年間も増築されないまま放置され、光の当たる場所ではなかった。

図書館長になった翌年の平成22年(2010)、役員会において特別経費として約1億5000万円を図書購入に充てていただくことが決定された。各研究者に配分しようという案もあったが、この機会を逃すと蔵書の拡充は見込めないと強く主張した結果である。これによって、書庫内の古びた本のオンパレードを一新し、重要な本の充実を図ることができた。ちなみに、この特別経費によって、電子ジャーナルなどのバックナンバーを用意することができた意義も大きい。ややもすると理系の先生方の中には本を購入することは趣味の本を集めるように理解される方もおられたが、図書はすべての大学構成員にとって有効なものだとの意識が高まったように思う。

3 改築・増築

急に図書館長になったわけで、図書館についての知識を持ち合わせていない私は当時の郷原副館長、次の森副館長などに他大学の図書館を案内していただき、よその事例を見ながら大学図書館のあるべき姿を考えた。私が図書館長になった頃、学習支援を意図して図書館内に設けられたラーニング・コモンズが導入され始めており、その対応に迫られていた。

ところが、本学においてはそれ以前に各地にある学部図書館の狭隘さが問題であった。学習スペースを作るためには各地の図書館の書架スペースを減らし、学生が学べる空間を作る必要があった。このために模索したのが、学部図書館の蔵書をできるだけ中央図書館にまとめ空間を作ることで、中央図書館の東側に書庫を造ろうということであった。しかしながら、現今の情勢では書庫増設を文部科学省に要求しても間違いなく取り上げてもらえないだろうと諸部署から意見があり、置かれていた状況を考えて。

古びた図書館を何とかしなければいけないと学長にも相談したが、現段階で新築などの予算は本学

に到底ない。企業などから予算を持ってくるしかないだろうとのことであった。このために本学の学生・教職員のための図書館ではなく、地域の人全体に開放し、地域のために役に立っている図書館なので、企業からも応援をして欲しいという方向に持っていくことにして、地域連携などを推し進めた。現在は学外者の誰でも受付さえすれば、いつでも利用が可能である。また、現段階で松本市、塩尻市、安曇野市、大町市の図書館からは本学の本を借り出すことが可能で、本学からこれらの図書館の蔵書も借り出せるようになっている。また、工学部図書館は市立飯山図書館、市立須坂図書館と連携を結び、農学部は市立伊那図書館、村立南箕輪図書館と連携を結んでいる。さらに、附属図書館は長野県立図書館とも連携協定を結んでいる。

当時の郷原副館長の下で図書館の職員たちが38頁からなる『信州大学附属図書館将来構想2011』という将来構想案を策定したのは、平成24年(2012)1月18日であった。ここでは知の支援(学習支援)のためには多様な学びの環境を造るために施設面での整備が必要なこと、知の提供のためには図書館で展示スペースを整備する必要があること、各学部図書館では座席数を確保した上で学生の快適な居場所が求められること、そのためにも各学部図書館から図書を移動し中央図書館で集中配架し総合利用すること、等が構想されていた。

2月24日の役員懇談会には、①学習のための利用空間・環境の整備、②研究環境の充実のために、③図書館地域貢献の推進、④機能的な学習支援のために、⑤資料保存機能の充実のために、の観点から図書館の増築の必要性を説明した。こうして、役員たちの間に図書館への意識を高めるよう、機会を見つけて説明を開始した。

平成24年(2012)6月27日の戦略企画会議に提出した資料である「信州大学附属図書館の課題とその解決」には、次のようなことが強調されている。

1. 中央図書館の耐震強度不足

南棟(昭和48年(1973)竣工)のIs値が0.53で文部科学省の基準である0.7以上に対応していないので早急な改修が必要である。

2. 中央図書館のバリアフリー化

時代に合わせて入口を1階に、できたら増築での実現が望ましい。

3. 収容力不足の解消

中央図書館の場合で蔵書数502,800冊に対して収容力は372,667冊で飽和率が1.35、各学部図書館を合わせた全体で1,248,481冊の蔵書数に対し収容力は936,991冊で飽和率が1.33なので、増築が必要である。

4. 新しい図書館機能の拡充

対話型学習空間などの拡充のためには増築が必要である。

5. 伝統的図書館機能の充実

フロア区画の再編による静謐空間(個室研究室等)の確保、資料の良好な環境での保管のためには増築が必要である。

この段階で最も重要なのは耐震改修であったが、その際の問題点として、工事は概ね10月から3月(卒業論文等の時期が含まれる)に行われ、その間、北棟のみでサービスを行わざるを得ないが、以下の問題が指摘された。

- A. 工事対象である南棟(北棟の一部を含む)の資料・什器を搬出・保管する必要がある。その際には耐震工事費約401百万円以外に、約126百万円が必要になる。
- B. 工事期間中の事務スペースを確保する必要がある。
北棟には入口がなく新設する必要がある。北棟1・2階には全面的に書架が設置されており、一部を撤去する必要がある。また、空調設備がないため最低限の暖房設備を用意する必要がある。北棟にはトイレ・水道設備がなく、新設(仮設)の必要がある。パソコン等の利用に必要な電源・ネットワーク設備を用意する必要がある。この経費については概算要求の対象外になるが、この段階では計算中であった。
- C. 耐震改修では面積は増えない(むしろ減る)ため収容力不足の解消などは実現されない。そこで収容力を増やすための20年耐用の増築工事(諸経費込み)で約1,073百万円。これは耐震工事費を除くものである。

こうした状況の中で耐震改修と増築との関係を見ると、

1. 耐震改修のみが行われた場合

「附属図書館の解決すべき課題」に示した課題のうち、解決されるのは中央図書館の耐震強度不足のみである。

2. 耐震改修の後に増築された場合

課題は概ね解決される。ただし耐震改修にあたっての問題点AおよびBへの対応が必要。

3. 耐震改修に先行して増築された場合

課題に示した問題は概ね解決される。また、増築される時期によるものの、耐震改修にあたっての問題点も多くの方が軽減される。

4. 耐震改修と同時に増築された場合

課題に示した課題は概ね解決される。ただし、耐震改修にあたっての問題点のAおよびBへの対応が必要。

この時期には信州大学での将来計画として、臨時駐車場となっている医学部グラウンドの場所に「ミクロスの森」を整備して、その中心に中央図書館をという構想があったので、まずは増築棟を設け、耐用20年の間に駐車場問題を解決し、資金を確保し、将来は「ミクロスの森」に図書館をと訴えた。ちなみにこの際の増築棟は北棟の東側に予定していた。

こうして増築の必要性を訴え、平成24年(2012)8月2日に増築案を戦略企画会議へ出した。この時

の増築案は地上3階、地下1階の4階建てで床面積4,443㎡、図書館の東側に逆L字型にする案であった。幸い役員から図書館の増築は必要だとの同意を得ることはできたが、金額的には北棟を建てるぐらいが精一杯であった。

ところで、平成25年(2013)1月に文部科学省は平成25年度国立大学法人等施設整備実施予定事業を発表したが、その中に本学の中央図書館の耐震が含まれていた。文部科学省からいただける補助金の4億3千万円は耐震・機能改修用だった。これによって既存の施設は耐震化でき、機能改修も可能になった。しかし、「附属図書館の解決すべき課題」の2案を実施することは不可能になった。また、一般的には耐震などにより内部面積は減る可能性が高い。この改修の時期に増築をしなければ、今後増築の機会は訪れないだろうと判断し、増築を強く役員たちに訴えた。同時にこれまで図書館が最も必要としていた書庫の増設ではなく、ラーニング・コモンズなど学生の学習環境を整えることを第一とすることにした。その際、大学側でそれまで提示されていた金額では北棟の大きさのものが南側3分2程度でできるに過ぎない。この金額で南側全面を覆う場合、薄っぺらな形になり使い勝手もよくないので、何とか金額を増やして南側全体を覆うような形にしていだきたいと役員会などで求めた。

その結果、平成25年(2013)2月1日の臨時役員会において私たちが切望していた中央図書館再開事業を承認していただいた。大学側は4億5千万円を出すことを決定し、増築が可能になったのである。

2月5日段階では4億5千万円で建てる増築案を検討し、狭い形で南側に増築するか、南側3分2に増築するかなどの案を練った。しかし3月4日には南側全面に広く増築の案も用意した。

4月23日に図書館長名で各学部(機構)長・各研究科長・学内共同教育研究施設の長に対し、中央図書館工事中の学習スペース、資料の利用等について協力を要請する文書を出した。

4月26日に人文学部長名で山沢学長に宛てて図書館耐震・改修・増築工事に対する申し入れがあり、
1. 多くの学生が使う開架と書籍の自由な利用を最大限保証すること 2. 他の図書雑誌類の利用についても最大限の便宜を図ること 3. 中央図書館の書籍の分散配置は極力抑制すること 4. 学生用の図書館の本を相互貸借、利用する際の便宜を図ること 5. 本部の担当部局との話し合いの場を設けること等が書面で求められた。

私は5月15日の役員会において工事スケジュールや図書館サービスなどについて説明した。役員会は決定してくれたが、教育研究評議会においては耐震や増築の間、現在の学生たちに不便が生じる、プレハブなどを造ってそうしたことのないようにとの意見が出てきた。プレハブを造るのには相当の予算が必要になる。6月4日の役員懇談会で、信州大学の財政状況を考慮すれば、プレハブを建設した場合、図書館は耐震改修のみとし、増築は中止せざるを得ないといったことが話し合われた。

しかし、3分2の建設、もしくは薄い形の増築は禍根を残すと、規模の拡大を求めた。その後、10月22日の学内共同教育研究施設等管理委員会において中央図書館再開事業の変更について説明し、①COC「地(知)の拠点事業」の拠点としての場の確保、②履修指導・学習指導の場の確保、③学芸員養成講座の場の確保、の観点から図書館の増築面積を追加したいと申し出、これが認められて7億円の予算となった。基本的に増築部分は学習用スペースにし、書庫を設けないことにした。

一方、いやでも耐震・改修工事の間は本館部分が使えなくなるので、本を移動させねばならなかった。貸し倉庫代などをいかに安く抑えるかが大きな課題になった。また、絵画をはじめとする貴重な資料をどこで保管するかも問題になった。さらに、学生などが調べ物をするのに不便がないようにすることも考えねばならなかった。

書籍については、この間連携協定を結んできた近隣の安曇野市や松本市の協力を一部得ることもできた。また、絵画については長野県信濃美術館に引き受けていただいた。さらに、貴重な資料の一部は松本市の旧制高等学校記念館も保管してくれた。

どうしても閉架しては困るという書籍については、学部の方で手当をして貰った。また、学習用のスペースも各学部に協力を仰ぎ、生協などにもお願いした。

南棟部分を改修する間、北棟の書庫の本を取り除き、人文学部の南側から北棟の2階に通路を設け、この2階に必要最小限の本を並べ、調べ物用等の空間と利用者サービスの対応窓口を設けた。事務室は北棟の3階に移した。職員は本や事務所の移動、様々な対応と、それこそ寝る間も惜しんで献身的に働いてくれた。

平成25年(2013)9月から中央図書館南棟の耐震・機能改修工事が始まり、平成26年(2014)3月に竣工した。東日本大震災の工事のあおりで全国的に建設工事が遅れている中で、予定通りに進めることができたのは多方面の関係者の協力によってであった。

6月から1,936㎡の南側の増築に着手した。この間現場で指揮してくれた環境施設部の方々、実際に工事にあたった方々、さらに無理を通してくれている職員が一体となって、より良い図書館の建設を目指した。そうした努力によって、平成27年(2015)3月ようやく増築部分も完成した。

貴重な資料を保管するためには特別資料室を用意した。特別資料室1には貴重な山岳の本を集めた小谷コレクションを入れた。北アルプスを望む位置にある本学にとって、山岳は特別な研究対象であり、小谷コレクションは全国的に見ても貴重なものである。それがこれまでよりずっとよい環境で收藏されるようになった。特別資料室2には吉川英治の『宮本武蔵』の挿絵で有名な石井鶴三資料、旧制松本高等学校が購入した絵画、この度新たに收藏された北杜夫文庫などが入っている。

増築にあたってはバリアフリーと安全・安心に配慮した。これまで中央館の入口は2階であったが、西門通りから直接に入れるようにし、メインエントランスを1階に変更した。車いすなどでも容易に利用できるよう南側・東側・西側にスロープを設け、館内には段差が無くなった。書架の間隔をこれまでの80cmから120cmに広げ、本などを見ている人の後ろを通ることができるようになった。

何よりも強調しておきたいのは、この度のリニューアルオープンに際し、多くの祝いの品の御寄贈を受けたことである。松本市内の陶磁器の老舗である知新堂会長の横沢徳人様からは、素晴らしい信楽焼の花器をいただいた。この花器は大町市から御寄贈いただいた花台の上に置かれた。長野県からは職員の要望をもとに木曾漆器の書見台が届いた。松本市からいただいた柚木沙弥郎氏の描いた「松高健児」の絵画は、教育政策課の課長さんがわざわざ東京にまで取りに行ってもってきてくれた。塩尻市からは伝統の木曾漆器の時計をあつらえていただいた。安曇野市は当方の無理を聞いて特産で貴重な天蚕のテーブルセンターを御寄贈いただいた。伊那市からは門外不出ともいえるタカトオコヒガンザクラを提供し

ていただき、図書館の南側に植えることができた。南箕輪村からは温湿度計と村のマスコットである「まっくん」の可愛いぬいぐるみをいただいた。飯山市からは飯山仏壇の技法による鷺森誠氏作の彫金の学章を市長の手渡しによっていただいた。

この度の改修・増築にあたってこれまで関係を結んできた市町村の協力は大変大きな力になったのである。

4 今後に向けて

現在本学の書庫は蔵書数に対して完全に飽和状態である。できるだけ除却処分を続けているが、本は常に増え続けているおり、図書館の重要な職務である図書などの収集・保管・提供のうち、収集と保管のために空間を用意しなくてはならない。これから学部図書館の学習環境をよくするため、空間を設けるためにも、中央図書館に本を集める必要がある。そのため、中央図書館における収蔵庫の拡充は緊急の課題である。

同時に今や図書館は教育の最前線でもある。従来のカリキュラムではなしえない、新たな教育を展開していくときに図書館の果たす役割は大きい。その際、鍵になるのは情報処理とグローバル化、よりきめの細かい学生サービスではないだろうか。

情報について言うなら、これまで本学の図書館は情報オンラインシステム SOAR を通じて研究者総覧や機関リポジトリを運用してきた。また、小谷コレクションの近世以前のものをウェブで見ることができるようにした「近世山岳関係データベース」、「信州大学繊維学部デジタルアーカイブ」、長野県内の大学をまとめた「信州共同リポジトリ」、さらに発掘調査報告書などをまとめた「長野県遺跡資料リポジトリ」「山梨県遺跡資料リポジトリ」「新潟県遺跡資料リポジトリ」、さらに昭和36年のいわゆる三六災害と呼ばれる大災害をまとめた「語り継ぐ“濁流の子”プロジェクト」を電子情報として流している。これらはいずれも日本の最先端を行くものであり、とりわけ遺跡資料リポジトリは全国の四分子、日本唯一の三県を担当している。

こうしたものの安定的供給と、新たな手法開発のためには本学の総合情報センターとより強い結びつきが望まれる。総合情報センターを図書館と同じ建物に置くことを今後考えねばならない。

グローバル化のためには各国からの留学生などと日本人学生などが気楽に集え、学べる空間が必要である。目下本学にはそうした場所が用意できていない。今後の展開を考えると、国際交流の場として図書館もあり、図書館が文化交流の場となっていくべきだと考える。そのためには本学のグローバル教育推進センターも図書館と一緒にした方がよいだろう。

さらに学生サービスのための部署を図書館の中に置くことも考えられる。

こうした従来にない様々なセンターとともに学生が能動的に学んでいく場所として附属図書館はありたい。このために目下空間として残してある中央図書館東側の空間にこうしたセンター、及び交流のための講堂、様々な資料を保管できる書庫などの機能を複合させた建物を造るべきだと考える。

大学がこれまでの枠にとらわれることなく、心豊かな学生を育てるため、情報の集積場である図書

館を通じて、学問を混じり合わせ、新たな学問ができるようになって欲しいものである。

このことを意図してあえて図書館東側には手を付けなかった。北棟の東側から図書館全体の東側にかけて逆L字形の建物を造る空閑地を残してある。この点は次の館長の手腕に期待したい。

おわりに

図書館の最大のサービス対象者は学生だと考える。今後ともよい学生に来て貰うためには、学生が来たいと考えるような大学にならなくてはいけない。図書館はそうしたサービスの最前線の一つである。このことを前提にしてリニューアル式典でテープカットをした四人の中に、学生自治会代表の松尾祐汰さんに参加をお願いした。また、農学部学生の作った木製ベンチを寄贈した学生代表も来賓としてお招きした。今後とも学生が主役となるような図書館運営に努めていただきたい。

リニューアルによって施設は何とかよその大学並みになったので、今後重要なのはサービスの展開である。いよいよ建物に魂をこめる番である。このために平成27年(2015)9月2日の役員会において、副館長(事務担当)とともに主に利用者サービス及び学術情報を担当するため、主幹(図書企画幹)を置くことが決定された。これまで職員たちは常に斬新なアイデアと学生への奉仕の気持ちを抱きながら活動してきた。これがさらに進むことであろう。

本学は大学の地域貢献度ランキングで三年連続総合日本一の評価を受けている。図書館も地域貢献を強く推進してきており、その成果の現れがリニューアルオープンにおける市民や連携市町村などからのお祝いの品だと考える。まずは大学関係者だけでなく、地域の人に愛され支援を受ける附属図書館でありたい。そのために新たに設けた展示スペースも大いに活用すべきである。

9月14日からは本学が最初に連携協定を結んだ飯山市の展示会を行う。地域貢献、地域の学習をしていくためには、学生さんたちに地元の市町村を具体的に知って貰う機会を提供しなければならない。その第一歩として飯山市を取り上げるが、飯山市からは有名な人形作家高橋まゆみさんの作品も展示される。

リニューアルオープンを契機に本学と縁が深い北杜夫氏の奥様とお嬢様から、北杜夫氏の所蔵されていた本を譲り受けることができ、北杜夫文庫を開設できた。また、それを記念しての斎藤由香様の講演会を機に、繊維学部卒業生で北杜夫さんと親交の深かった平沢伴明様から、北杜夫さんの自作短歌軸装2点とエッセイ自筆原稿「親切なゼゲン屋さんに大迷惑をかけた顛末」(折帳装丁箱入り)の預託を受け入れた。図書館が新たなものになることによって、このように新たな蔵書なども増えてくるであろう。

いずれにしろ、現時点で本学の費やし得る資金では最も素晴らしい図書館増築になったと信じている。これをなしたの是一丸になって働く図書館員たちの少しでも図書館をよくしたいという気持ちであり、それを支えてくれた全教職員、そして文科省、実際に工事にあたってくれた工事関係者のおかげである。この点心より感謝するものである。そしてこの時にあたって附属図書館長として現場に立ち会い、微力を尽くせたことを幸運に思う。今後の信州大学附属図書館の繁栄を祈念して擲筆する。